

# シェアリング会

2021年3月6日なは市民活動支援センター

全8回の「ゆんたくリサーチ(ヒアリング調査)」を終えた調査員と、ヒアリングを受けた外国人ゲストが集まり、調査で印象的だった言葉やシーン、調査中のエピソードを出し合いました。研修から約2か月ぶりの対面再会となったシェアリング会でしたが、調査中の思い出話や、「Zoom 越しに初めて会えた…」といった声が聞こえ、会って話せる喜びを実感することができました。



調査で印象的だったシーンやことば、今の気持ちを絵や色で表現しました。1人1人の個性があふれ、会場がパッと明るくなりました。プロジェクトを通して、言葉で伝わりにくいことは絵や文字、ジェスチャーで表現していました。コミュニケーションの方法は無限大です!

## 寸劇で表現! ~調査中の困った...!~

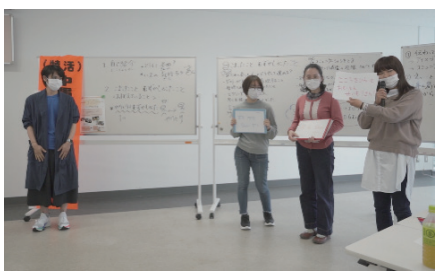
初の試みとなったオンラインでの調査では、機器トラブルをはじめ、オンラインならではのコミュニケーションのむずかしさなど、困った事態の連続でした。調査員・外国人ゲスト・事務局がそれぞれの立場で「困った!」シーンを出し合い、「次はこうしたらどうだろう?」をテーマに、話し合ったアイデアを寸劇で表現しました。会場からは「わかるわかる!」「なるほど!」といった声が聞こえてきました。

調査員の「困った!」



・日本語の単語が伝わらなくて大変だった場面がある。どこから英語に切り替えるのか、日本語で全部やるべきなのかと悩んだ。

→やさしい日本語に加えて、やさしい英語も交えてみるといいかも!時に通訳がいても嬉しい!



・初めてあった人とどうやって進めよう?話がかぶったら失礼かな...?など、進行に困ってしまう場面があった。

→困ったらすぐに事務局が飛んできてくれるようなシステムがあると助かる!



・アイスブレイク\*1が短い時の調査では、お互いに緊張する場面があった。ゲストの気持ちを引き出すことが時にむずかしかった。

→ゲストの母語であいさつや自己紹介をとりいれてみる! コミュニケーションを大切にしたヒアリング調査なので、流れを考えるとときから外国人の意見を取り入れてもよかったかも!

\*1 アイスブレイク...緊張感をほぐして、打ち解けやすい雰囲気をつくること

## 外国人ゲストの「困った！」



日本語が難しく聞き取れない時や、考えていることはたくさんあったけど、うまく気持ちを表現できない時があった。  
→わからないって伝えることや、助けを求めることも必要！  
そのために助けを求めやすい人がいるような環境があったら安心できたかも。

## 事務局の「困った！」



毎回外国人ゲストを探すのが大変だった。調整にいつも時間がかかってしまった。  
→後半回では調査員の皆さんの協力もあって、調整がスムーズだった!もっと早く助けてって言えばよかった。

## 調査員の声



※感想シートより抜粋

オンラインでのヒアリングの難しさはあったものの、初対面でもこういった活動がオンラインで出来るのはとても良いなと思いました。オンラインだと地域に関わらず気軽に参加できるので、もっと色々な事に参加、挑戦してみたいなと思いました。

オンラインで初対面の外国の方とお話しするのはなかなか難しかった。沖縄という島に多種多様な人々が生活している事に感銘を受けた。これからも近所として隣人として、仲良くしていきたい。

外国人の皆さんが、色々な事を考えて生活しているのが分かって良かったです。

新しい人との出会いに、自分の気持ちに変化していく過程がおもしろいな、と思いました。

沖縄在住の外国人と、たくさん話せる場は貴重だと思いました。同じ事を外国人の方々も感じている事を知りました。

県内にこんなに多国籍な外国人がいるとは思っていませんでした。外国人の方達も「日本人と仲良くなりたいと思っている」と、よく口にしてるのが嬉しくて、街中で見かけたら積極的に声をかけてみようと思いました。

自分が無意識に難しい日本語を使っているのかもしれないと気づいた。沖縄の人は優しいと言われていたので、困っている外国人には、声をかけるなどイメージを壊さない様に動いていきたい。

このプロジェクトの目的を(自分が)理解できておらず、困りごと調査だと思っていました。でも、人と繋がれて楽しかったです。自分の事でいっぱいいっぱいでしたが、「ゆいまーる」の大切さに気づかせてもらい、元気を頂きました。

外国人に対する「壁」が自分には無いと思い込んでいたが、気がつかない内に「壁」が出来ていたかもしれない気がした。これからは「自分が～、自分から～」という思いの前に、相手の気持ちや意見を受け止めようと思った。

# 大学授業連携

沖縄キリスト教学院大学・沖縄大学と連携し、総勢約50名の学生とともに沖縄の多文化共生について学び、考え、「ゆんたくリサーチ」を実施しました。



## STEP1

### 大学授業

#### どうして多文化共生が必要なの？

在住外国人の増加率が全国2位の沖縄県。街中でも外国人と出会う機会が増えました。地域に外国人が増えることで起こっている問題や課題を出し合い、その背景について考えました。

#### 在住外国人を取り巻く社会課題って？

新聞記事を活用し、グループで意見を交換しながら在住外国人を取り巻く社会課題について考えました。

学生の感想(感想シートより抜粋)

- 技能実習生は低賃金・重労働で日本の職場を支えているのに正式な労働者として認められず、場合によっては奴隷のように働かされているというのは人権的にも問題があると思う。
- コロナのせいで仕事が見つからないのは日本人も一緒だけど、言葉や文化の壁もあるから、外国人は日本人より苦しい思いをしているかもしれないと思った。
- 私達にとっては当たり前の高校進学が、在住外国人の家族・子どもにとってはこんなにも大変なことだと知った。日本語を母語にしない人にとっては、2倍も3倍も難しいと思う。



## STEP2

### 実践

#### 在住外国人に聞いてみたい！ 「どこの国からきたの？」「どうして沖縄に？」

県内の在住外国人をゲストに招き、彼らの国の言葉や文化、宗教をはじめ、沖縄での生活についてのあれこれを「ゆんたくリサーチ」しました。授業での「ゆんたくリサーチ」に加え、沖縄キリスト教学院大学では冬休みを利用して、各学生が地域の在住外国人にヒアリングを行いました。

## 「これから社会で働く 大学生へ」

学生時代に同年代の日本人だけでなく、年上の社会人や外国籍の方との交流を経験しておいた方が社会人になるためのイメージがしやすくなり、就職活動にもつながると思います。沖縄は様々な国籍の方がいるので、学部はどの分野であっても、英語力は絶対的に必須だと思います。

これから就職する会社ではどんな方が働いているのか、その国の文化やその人の性格などを知っていくと職場も楽しくなると思います。外国人の方だからといって攻めたり、命令したりはダメだと思います。そして社会人になったばかりは慣れるまで色々大変になるかもしれませんが、しばらく経ってからは職場も楽しくなると思います。



Asian Dining Restaurant経営  
ネウパネ・スザン (Neupane Sujan)

## 授業を終えた、大学生の声

(感想シートより抜粋)

大切なことは、沖縄と一緒に暮らす同じ人間であるので偏見を持たないということ。誰しも気づかないうちに偏見を持ってしまうこともあるけれど、それを無くすためにも、外国人との交流を作ることが必要だと強く感じた。実際に関わることで、少しでも理解し合える仲間が増えるのではないかと思うし、私たちが今大学生だからこそ、自分たちが動いて、交流の場を作ること、友達にもなれる可能性があると感じた。

調査を通して、在住外国人が日本に対して思っていることをたくさん聞けたのでとてもよかった。共に地域に暮らす市民として、もっと交流を増やすことで外国人への偏見や冷たい視線をなくすことができると思った。もっと広い世代に今の現状を知ってもらいたい。

授業を通して、今まで見えなかった外国人の悩みへの理解が深まった。どういう悩みがあるかを知っておく事も重要だけど、悩んでいる人とのコミュニケーションや話し合いが何より重要なんじゃないかと感じた。

授業を通して思った事は、言語の壁は確かにあるけれど、それに囚われず外国人・日本人とあまりカテゴライズしない事が良いと思った。"外国人だから"というより日本人とでも出来る事、好きなスポーツやゲーム等で何か一緒にしたいと思った。

外国人と仕事がしてみたい。彼らのアイデアや思考は日本人には持ってないものを持っているので楽しそうだなと思った。

行事などを通して、もっと交流したい。一緒に準備から共同作業することでより、関係を深めていけると思う。沖縄に来たばかりの外国人の方もいると思うので、沖縄について知る機会や暮らす上での新しい知識を得る機会となる場を設けたい。

## 「多文化共生のインタビューを通して学生と共に学ぶ」

教育現場でやりがちな教えの一つに、社会的弱者と思う方々には配慮し、何かできる支援を探そうという発想だ。

今回のプログラムで学んだことは、実際に県内に在住する外国籍のお二人や学生自ら外国人とつながり個々のインタビューを通じて、「助けるどころか、私たちこそ彼らから学ぶことが沢山ある」という感想が、多くの学生から見受けられた。多様かつ柔軟な発想で暮らす様子を学生たちは羨望のまなざしを向け、若者という同じ目線で趣味や将来の夢を語り合う。それと同時に、共に暮らす友人の生活環境、労働や差別の目に対して心を馳せるものも多くいた。インタビューする学生や、インタビューを受ける外国人という関係から、まさに共に暮らす友人の存在になっていく様子が見られた。このような生きた活動が日本の学生に力を与え、バイト先、就職先で彼らが多文化共生の実践者となるだろう。

この機会に感謝し、継続的に多文化共生プログラムの実施を祈念いたします。



沖縄キリスト教学院大学准教授  
玉城直美 (Tamashiro Naomi)

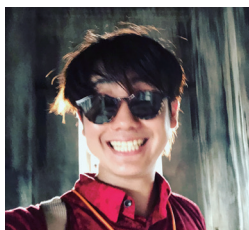
# 調査員のみなさん

学生・会社員・主婦・求職中など、日本人・外国人を問わず、幅広い職業・職種の方が調査員ボランティアとして調査に協力してくれました。



**キヨカ**

出身地：読谷村



**せいもりしょうた**

出身地：那覇市



**アカネ**

出身地：うるま市



**眞壁由香**

出身地：徳島県



**いっちゃん**

出身地：南城市



**カルロス・ルゴ**

出身地：メキシコ



**Arakaki**

出身地：コザ市



**キンジョータカロー**

出身地：那覇市



**あかね**

出身地：北谷町



**ゆかりんまる**  
出身地：南城市



**kaori**  
出身地：うるま市



**りな**  
出身地：うるま市



**しおり**  
出身地：沖縄県



**Shuri**  
出身地：那覇市



**宮城**  
出身地：浦添市



**ちや**  
出身地：福岡県



**YUKA**  
出身地：豊見城市



**高江洲**  
出身地：那覇市



**さき**  
出身地：豊見城市



**みーきー**  
出身地：宜野湾市



**みわっち**  
出身地：宜野湾市

# 「みんなで困れる社会へ」

【沖縄NGOセンター事務局】佐々木綾菜(Sasaki Ayana)



オンラインでのヒアリング調査は、とにかく「困った！」の連続でした。機器トラブルをはじめ、伝えたい言葉が伝わらなかったり、時間配分や進行がうまくいかなかったり。オンラインでは相手の視線や細かい感情を汲み取れず、みんなが手探りで回を重ねていたように思います。調査員・外国人ゲストの皆さんが、困った表情のままZoomを後にする様子も印象に残っています。

事務局でもこんな出来事がありました。プロジェクトも終盤にさしかかったころ、調査のペースに対して外国人ゲストへの声かけが間に合わず、「調査まであと2日なのにゲストが決まらない・・・！」といった状況が多々ありました。調査員の皆さんに申し訳ない気持ちもありましたが、ある時、思い切つて「ゲストが足りていないんです。どなたかお知り合いを紹介していただけますか？」と助けを求めたところ、人の輪をつたってあれよあれよという間に枠が埋まっていきました。調査員の皆さんは近所の外国人に声をかけてくれたり、サークル仲間や友人を次々にあたってくれました。

1人で悩んでいたことが、みんなの力であつという間に解決したのです。その時、「どうしてもっと早く助けてって言えなかったんだろう。」という思いが頭をよぎりました。私は心のどこかで「私1人がやらなきゃいけないんだ。」という勝手な思い込みがあつたのだと気づきました。そこには日本人、外国人を問わず、困ったときに「私は困っています、助けてください」と言いにくい社会の構造があるように感じました。

シェアリング会ではこれらの「困った！」を、調査員・外国人ゲスト・事務局のそれぞれが出し合い、共有し、みんなで解決策を模索できるようなプログラムを目指しました。調査中に言えなかったことをシェアすることで、だれか1人が頑張らない・抱えない・解決しない、みんなで痛みを共有できたらいいなと思いました。

楽しいことや嬉しいことで深まる絆があります。でも、痛みを共有することで深まる絆もあるように感じます。同じように、「共生（共に生きる）」への道のりには楽しいことも、時につらいこともあるのかもしれません。

今回のプロジェクトでは、多くの人が見えないところで力を貸してくれました。会場までZoom操作のサポートにきてくれた人、スタッフが席を外した時間を繋いでくれた人、初めての調査員をやさしくサポートしてくれた人、研修やシェアリング会では朝早くから会場の装飾や受付、後片付けを手伝ってくれる人もいました。これらも含めて、みんなで作ったプロジェクトだと思っています。

私自身も模索しながらの日々ですが、コロナ禍でみんなが困っている今だからこそ、誰か1人ががんばる社会ではなく、みんなで困って、みんなの力で、みんなが力を発揮できる多文化共生社会をつくっていきたいです。